モーツァルト室内管弦楽団　第160回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester / 160. Regulärkonzert

〈生誕300年記念カール・フィリップ・エマヌエル・バッハとシュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）様式〉

― 門　良一によるレクチュア・コンサート ―

2014年9月7日（日）午後2時■いずみホール

Sonntag, 7. September, 2014　14Uhr　Izumi Hall Osaka

■主催：モーツァルト室内管弦楽団　http://moz-kam.org

■協賛：いずみホール〔一般財団法人 住友生命福祉文化財団〕

■マネジメント：大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504

＊ロビーでは大阪ユニセフ協会を通じて、世界の子どもたちのための募金活動を行っています。

心から心へ…

Program

モーツァルト室内管弦楽団 第160回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester /160. Regulärkonzert

2014年9月7日(日)午後2時●いずみホール

Sonntag, 7. September, 2014　14Uhr　Izumi Hall Osaka

〈生誕300年記念カール・フィリップ・エマヌエル・バッハとシュトルム・ウント・ドランク(疾風怒濤)様式〉

—門　良一によるレクチュア・コンサート—

［参考演奏］　ベートーヴェン　交響曲 第5番 ハ短調《運命》第1楽章(一部)

カール・フィリップ・エマニュエル・バッハ　交響曲 ニ長調 Wq.183-1 第1楽章(一部)

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ
Carl Philipp Emanuel Bach(1714-1788)

交響曲 ホ短調 Wq.177
Sinfonie e-moll Wq.177

Ⅰ. Allegro assai
Ⅱ. Andante moderato
Ⅲ. Allegro

ハイドン
Joseph Haydn(1732-1809)

交響曲 第44番 ホ短調《哀悼》
Sinfonie Nr.44 e-moll Hob.I-44 „Trauersinfonie"

Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Menuetto：Allegretto *Canone in Diapason*
Ⅲ. Adagio
Ⅳ. Finale：Presto

＊　＊　＊

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ
Carl Philipp Emanuel Bach(1714-1788)

フルート協奏曲 ニ短調(チェンバロ協奏曲Wq.22からの編曲)
Konzert d-moll für Flöte und Streicher (nach dem Klavier-Konzert Wq.22)

Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Un poco Andante
Ⅲ. Allegro di molto

［参考演奏］　モーツァルト　ピアノ協奏曲　第3番　ニ長調　K.40　第3楽章(一部)
(原曲：エマヌエル・バッハのピアノ曲《ボヘミア人La Boehmer》Wq.117)

モーツァルト　ピアノ協奏曲　第12番　イ長調　K.414　第2楽章(一部)
(原曲：クリスティアン・バッハの歌劇《魅惑の女La calamita de cuori》序曲)

ヨハン・クリスティアン・バッハ
Johann Christian Bach(1735-1782)

交響曲 ト短調 作品6の6
Sinfonie g-moll Op.6-6

Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Andante più tosto Adagio
Ⅲ. Allegro molto

モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

交響曲 第25番 ト短調 K.183
Sinfonie Nr.25 g-moll KV183

Ⅰ. Allegro con brio
Ⅱ. Andante
Ⅲ. Menuetto
Ⅳ. Allegro

フルート：大江 浩志／Solo-Flöte：Hiroshi Oe
コンサートマスター：釋　伸司／Konzertmeister：Shinji Shaku
指揮とお話：門　良一／Dirigent und Erzähler：Ryoichi Kado

「大バッハ」カール・フィリップ・エマヌエルとその系譜

バッハ家は、世に言う「大バッハ」ヨハン・セバスティアンを中心としてその前後数代にわたって多くの音楽家が輩出した名家系である。ヨハン・セバスティアン・バッハと二人の妻、マリア・バルバラとアンナ・マグダレーナとの間には20人もの子供が生まれたが、その内成人したのは10人で、内4人は娘であった。残り6人の男児の内、音楽家になったのは4人である。それを家系図で示す。

- ヨハン・セバスティアン（1685-1750）
  - ヴィルヘルム・フリーデマン（1710-1784）
  - カール・フィリップ・エマヌエル（1714-1788）
  - ヨハン・クリストフ・フリードリヒ（1732-1795）
  - ヨハン・クリスティアン（1735-1782）

長男ヴィルヘルム・フリーデマンと次男カール・フィリップ・エマヌエルは先妻マリア・バルバラとの間の子、五男ヨハン・クリストフ・フリードリヒと六男ヨハン・クリスティアンとは後妻アンナ・マグダレーナとの間の子である。

ヴィルヘルム・フリーデマンは大変才能に恵まれており、ドレスデンのオルガニストを務めたが、性格的なことから職を失い、晩年は放浪に近い生活を送った。しかしその楽想は後の古典派やロマン派に影響を与え、モーツァルトも最後の作品「レクイエム」において彼の作品を範としているところがある。

カール・フィリップ・エマヌエルはプロシャ王フリードリヒ二世（フリードリヒ大王）に仕え、「ベルリンのバッハ」と呼ばれた。後、代父でもあるゲオルク・フィリップ・テレマン（1681-1767）の後継者としてハンブルクの音楽監督を務めたので、「ハンブルクのバッハ」とも呼ばれた。鍵盤楽器の演奏及び理論の大家として名をなし、後述するようにハイドンをはじめとする後世に大きな影響を残している。当時、「大バッハ」という呼び名は父ヨハン・セバスティアンではなく彼のことを指したほどである。

ヨハン・クリストフ・フリードリヒは、北ドイツの地方都市で一音楽家として一生を終え、大成はしなかったが作品は多く残されている。

末っ子のヨハン・クリスティアンは、その活躍した都市の名から「ミラノのバッハ」、「ロンドンのバッハ」の異名で呼ばれる。8歳のモーツァルトとロンドンで出会い、その後も大きな影響を与え続けたことはよく知られている。

さて、バッハの息子たちが活躍した1730年頃から1780年頃までの時期は、この時代に活躍した他の作曲家の活動をも含めて「前古典派時代」と呼ばれるのが常である。この中途半端で無個性的な呼び名は、この時代の音楽の歴史を正しく言い表しているとは言い難い。この半世紀にも及ぶ時代は、イタリアのヴィヴァルディやドイツのテレマン、ヨハン・セバスティアン・バッハたちが完成したバロック様式から、ハイドン、モーツァルトの古典派様式へと劇的な変化をする音楽史的に非常に重要な時期である。この時代の主役が、バロックの王者ヨハン・セバスティアン・バッハの息子たちであり、彼らがその父親の巨大な影響力から抜け出して新しい時代を切り拓いたということは大きな意味を持っている。

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハの主たる音楽様式は「多感様式」（「感情過多様式」ともいう）と呼ばれる。1753年に出版された自著「クラヴィーア奏法」において彼は次のように述べている。『音楽家は、自分自身が感動しなければ、他人を感動させることができないので、聴衆の心に呼び起こそうとするすべての情緒の中に自分自身もひたることがぜひとも必要である。音楽家は聴衆に自分の感情をほのめかすのである。そしてそのようにしてこそ、聴衆の心を最もよく動かして、共感させることができるのである。』（エマヌエル・バッハの「クラヴィーア奏法」は、ほぼ同時代のレオポルト・モーツァルト（モーツァルトの父親、1719-1787）の著した「ヴァイオリン奏法」とともに当時の二大名著とされ、音楽家のバイブルとして後世に大きな影響を与えた。）言わんとするところは、音楽の表現する感情を演奏者の表情や身振りに最大限に表して、聴衆をその感情に引っ張りこまなければならない、ということであろう。彼の音楽の特徴は、速いテンポの曲では直情径行というか猪突猛進というか、非常に激しい表現がまっしぐらに続き、それが突然ブツッと切れたり、弱くなったり、全然違うハーモニーになったりして、予測がつきにくいのである。ゆっくりしたテンポではそれと全く正反対の、落ち着いて柔らかく穏やかな音楽になる。彼の音楽は感情表現の振幅が非常に大きいのである。このようなスタイルはベートーヴェンやそれに続くロマン派の音楽と通じるものが多いと言えよう。

エマヌエル・バッハの「多感様式」は、30歳後半から40歳にかけてのハイドンに大きく影響を与え、一連の激しい表現を持つ短調交響曲を作らせた（第26番《ラメンタツィオーネ》、第34番、第44番《哀悼》、第45番《告別》、第49番《受難》）。これらはハイドンの「シュトルム・ウント・ドランク交響曲」と呼ばれている。ハイドンはエマヌエル・バッハを大変尊敬していて、1795年、第2回ロンドン旅行の帰途、エマヌエル・バッハの居たハンブルクに立ち寄ったのだが、エマヌエルは7年前に亡くなっていてその一人娘に合うことができたのみであった。

これら一連のハイドンの作品が同時代の他の作曲家に与えた影響は大きく、「シュトルム・ウント・ドランク病」とでも呼びたいような、一種の伝染病のようにヨーロッパ中に蔓延し、エマヌエル・バッハの末弟であるヨハン・クリスティアン・バッハ、そしてモーツァルトに至るまで、この時代の多くの作曲家が競って短調の激しい交響曲を書いた。このような交響曲のスタイルは、後のベートーヴェン、それに続くロマン派の作曲家たちによって受け継がれている。

[参考文献]
・久保田慶一著「バッハの息子たち―バロックから古典派へ」(音楽之友社、1987年)
・久保田慶一著「エマヌエル・バッハ―音楽の近代を切り拓いた《独創精神》」(東京書籍、2003年)
・大宮真琴著「ハイドン　新版」(音楽之友社、1981年)

[参考演奏] **ベートーヴェン:交響曲 第5番 ハ短調《運命》**の第1楽章の開始部

ベートーヴェンの9つの交響曲のうち、第9番とともにただ2曲の短調交響曲。1808年完成。

[参考演奏] **カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ:交響曲 ニ長調 Wq.183-1**　第1楽章の始めの部分

「12の声部のためのオーケストラ交響曲」と名付けられた4曲のセットの第1曲。ハンブルク時代の作品で、1775～6年の作。なお、エマヌエル・バッハは自己の作品に番号を付けなかったので、ヴォトケンヌ(Alfred Wotquenne, 1867-1939)という人の付けたWq.番号が一般的である(モーツァルトの作品におけるケッヒェル番号、K.と同様であるが、ケッヒェル番号が年代順であるのに対しヴォトケンヌ番号はジャンル別になっている)。

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ:交響曲 ホ短調　Wq.177

1755～58年のベルリン時代に作られた6曲のセットの第4曲。弦楽合奏によって演奏されるが、管楽器の入った版もある(Wq.178)。急―緩―急の3楽章形式。

ハイドン:交響曲 第44番 ホ短調 Hob.I-44《哀悼》

ハイドンの「シュトルム・ウント・ドランク交響曲」中の最高傑作とされる。1771年の作。ハイドンが確立したメヌエット楽章を含む4楽章形式であるが、そのメヌエットが第2楽章に置かれ、緩徐楽章が第3楽章になっているのが異例とも言える。第3楽章アダージョは、ハイドンが自分の葬儀において奏するようにと言ったと伝えられ、事実ベルリンにおけるハイドンの追悼式で演奏されたという。《哀悼》(または《悲しみ》)という後世がつけた別名は、そのことによるのか、あるいは曲の内容によるのか不明である。メヌエット楽章がオクターブのカノンになっているので、《カノーネ・シンフォニア》の異名もある。なお、ハイドンの作品につけられるHob.番号はホーボーケン(Anthony van Hoboken, 1887-1983)によるもので、上記エマヌエル・バッハのWq.番号と同様ジャンル別になっている。

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ:フルート協奏曲 ニ短調

今日、エマヌエル・バッハの作品中最もよく知られている名曲である。原曲はチェンバロ協奏曲　ニ短調　Wq.22で、おそらくフルートの名手であったフリードリヒ大王のためにエマヌエル自身がフルート用に編曲したのであろう。エマヌエルのチェンバロ協奏曲は2台用も含めて全部で52曲の多くにのぼっている。

[参考演奏] **モーツァルト:ピアノ協奏曲 第3番 ニ長調 K.40** 第3楽章の始めの部分

モーツァルトのピアノ協奏曲の第1～4番は、彼がピアノ協奏曲の習作として他人のピアノ作品にオーケストラ伴奏を付けたもので、この第3番は第1楽章はJ.ホナウアー、第2楽章はJ.エッカルト、そして第3楽章はエマヌエル・バッハの曲をそれぞれ編曲したものである。エマヌエルの原曲は「ボヘミア人」と名付けられた小品である。

[参考演奏] **モーツァルト:ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 K.414**　第2楽章の始めの部分

この曲の作曲された1782年にヨハン・クリスティアン・バッハが亡くなっている。彼の繊細で都会的な作風はモーツァルトに大きな影響を与えた。原曲はクリスティアンのオペラ《魅惑の女》の序曲の緩徐楽章である。このピアノ協奏曲はモーツァルトのクリスティアンに対するオマージュとして知られる。

ヨハン・クリスティアン・バッハ:交響曲 ト短調 作品6の6

1770年に出版されている。クリスティアン・バッハに短調の作品は少なく、これはハイドンの影響で書かれたと思われるめずらしく暗い交響曲である。あるいは兄エマヌエルの直接の影響とも考えられる。急―緩―急の3楽章形式。

モーツァルト:交響曲 第25番 ト短調 K.183

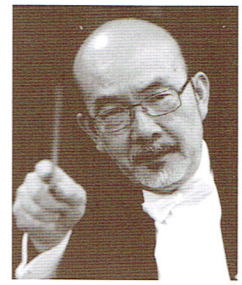
1773年、モーツァルト17歳の作。モーツァルトの全交響曲中、有名な第40番とただ二つの短調交響曲であり、ともにト短調であることはよく知られている。第2楽章が緩徐楽章、第3楽章がメヌエットの、通常の4楽章形式である。1985年に日本でも公開された映画「アマデウス」の冒頭で第1楽章の始めの部分が激しく鳴り響くので一躍世に知られるようになった。ハイドンに比べ、激しさの中に抒情性が見られる。15年後に書かれた同じト短調の第40番は、「シュトルム・ウント・ドランク様式」が下敷きになっているが、さらに洗練された、より複雑でロマンティックな音楽になっている。

The orchestra, Mozart-Kammerorchester, and the conductor, Ryoichi Kado, would like to express their sincere thanks to The Packard Humanities Institute for providing the orchestral parts of C.P.E.Bach's Symphony in E Minor Wq.177/8 and the Harpsichord Concerto in D Minor Wq.22, the latter of which is the original version of the Flute Concerto in D Minor.

モーツァルト室内管弦楽団と指揮者門 良一は、エマヌエル・バッハの交響曲ホ短調Wq.177/8とチェンバロ協奏曲ニ短調Wq.22(フルート協奏曲ニ短調の原曲)のオーケストラ・パート譜を供給していただいたThe Packard Humanities Instituteに対し、深く感謝をいたします。

Profiles

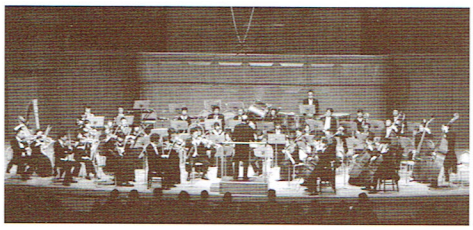
門　良一●指揮　*Ryoichi Kado, Dirigent*



1939年大阪生まれ。フルートを曽根亮一氏に、指揮法を青山政雄氏に師事。1962年京都大学理学部卒業、67年同大学院修了。70年同志とともにモーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり現在に至る。87年モーツァルトのピアノ協奏曲全27曲、交響曲全74曲の連続演奏完結に対し、モーツァルト室内管弦楽団とともに第5回藤堂音楽賞を受賞。1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。

大江 浩志●フルート　*Hiroshi Oe, Flöte*

明石市出身。京都市立芸術大学を卒業後渡独。国立マンハイム音楽大学芸術家養成課程を最優秀の成績で卒業。帰国後は、ソロ、室内楽、オーケストラなどを中心に活動している。また、邦人作品や新作発表にも積極的に取り組んでいる。89、97、07年大阪にてソロリサイタル開催。97年西オーストラリア・パースの招聘により『ひょうご文化ウィーク』にて独奏。08年NHK-FM『名曲リサイタル』に出演。平成8年度《坂井時忠音楽賞》受賞。現在、大阪音楽大学、相愛大学、ムラマツフルートレッスンセンター各講師。モーツァルト室内管弦楽団首席奏者。《アンサンブル・ダンツィ大阪》及び《アンサンブル135》メンバー。伊丹シティフィルトレーナー、明石フィル演奏委員。日本フルート協会理事。



モーツァルト室内管弦楽団●管弦楽　*Mozart-Kammerorchester*

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、40数年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に17回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス(85、87年)、シプリアン・カツァリス(93、94年)、ペーター・ダム(83、86、88、98、00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル(86年)、ライナー・キュッヒル(90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シティオペラの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。「素晴らしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。07～09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09～11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を、また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を開催している。

●メンバー　**コンサートマスター**　釋　伸司

第1ヴァイオリン	釋　伸司		川島多美子		柳瀬　史佳		ホルン	垣本　昌芳
	本多　智子		日暮　霞		三宅　香織			佐藤　明美
	松本　紗希		幣　晴代	コントラバス	土屋　綾子			垣本奈緒子
	菊池　優理	ヴィオラ	佐份利祐子		北田　由美			長野　夏弥
	森住　憲一		白木原有子	オーボエ	福田　淳		チェンバロ	秋山　裕子
	中野　瑞己		酢谷　恭子		須貝　絵里			
第2ヴァイオリン	中川　敦史		高野ちか子	ファゴット	佐伯　利之			
	増永　花恵	チェロ	日野　俊介		倉永　晴美			

◆第161回定期演奏会◆〈モーツァルトとハイドン〉その8

2014年12月20日(土)午後2時　いずみホール

モーツァルト:《救われたベトゥーリア》K.118 序曲
　ピアノ協奏曲 第20番 ニ短調 K.466 [Pf/岡田佳子]
　オッフェルトリウム《主のお憐みを》K.222、キリエ ニ短調K.341
ハイドン:《ネルソン・ミサ》ニ短調
[Sop/木村能里子 Alt/山田愛子 Ten/西垣俊朗 Bas/萩原寛明]
合唱/モーツァルト記念合唱団(合唱指揮:益子　務)
指揮/門　良一

◆第162回定期演奏会◆〈フランス音楽特集〉

2015年1月11日(日)午後2時　いずみホール

―室内オーケストラによるベルリオーズ第2弾！―

アダン:歌劇《われもし王者なりせば》序曲
ラヴェル:ピアノ協奏曲 [Pf/山田富士子]
ベルリオーズ:ヴィオラ独奏付き交響曲《イタリアのハロルド》
[Va/店村眞積(元讀響・N響首席、現京響首席)]
指揮/門　良一

モーツァルト室内管弦楽団 後援会

事務局 TEL06-6135-0503 / FAX06-6135-0504
〒530-0041大阪市北区天神橋2-5-25-909 大阪アーティスト協会内

会長代理　谷口　安平（京都大学名誉教授）
監　　事　玉井　英二（三井住友カード特別顧問）
顧　　問　伊藤 郁太郎（大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長）　梅原　猛（国際日本文化研究センター顧問）
（50音順）

≪法人会員≫（50音順）

荒川化学工業
遺族支え愛ネット
上野製薬
関西電力
きんでん
小林製薬
阪野商店
三孝社
サントリーホールディングス
新日鐵住金
住友精密工業
住友生命保険
住友倉庫
ダイキン工業
大同ケミカルエンジニアリング
髙松建設
中西金属工業
林六
福山製紙
丸山興産
三井住友カード
三井住友銀行

≪個人会員≫（入会順・敬称略）

深田晴世
福岡隆子
梅原一哲
石本三千也
田村眞也
岸田克己
梅村博也
屋良卍佐治
國友正和
稲垣千代子
浮田俊太郎
桑山弘
三谷郁子
三浦信一郎
水島敬夫
渡辺優子
平川美津子
安藤邦洋
橋本太三雄
阿部由美子
中川泰幸
村本孝夫
松本幸道
笹川忠士
緒林桂子
碓井昭彦
碓井みち子
長井重龜
岸田多門
能田豊
宮井茂治
祐野尚子
金定秀光
金定嘉也子
菅正徳
日高穂
藤原啓助
馬場明和
阪野和子
和田暁夫
桑名孝子
石光正男
髙杉方宏
川島啓助
中井武司
中井佐和子
豊田成子
切畑敦詞
中東富佐子
三石武男
内藤芳美
神林恒道
杉浦和子
野村透
今井安男
玉手隆子
野崎志朗
橋本靖昭
有賀熙雄
佐野哲郎
小柳陽一
田中四朗
島村猛
河原恭子
松井とも子
得田栄蔵
菱谷勝次郎
足立宣治
東武次郎
豊田紘生
飯田祐子
宮井芳子
塩脇昭司
塩脇祥子
河渕清子
佐竹時子
荒木陽子
宮崎悦朗
栗原順子
野口祐三
野口外志子
森本武
小山浩
野原清秀
松井基純
松井香代子
山本道子
大磯隆一
細井提吉
大原清司
大原典子
伊藤久栄
山村哲夫
速水洋紀
天尾登
橋本博
梁瀬健
松山壽一
松谷郁子
山下鉄男
萬野尊昭
佐野哲昭
八木孝昌
高田早智子
松田富久子
西垣真理子
榎原良行
渡辺義明
小川雄介
能田久美
河井洋子
宮北浩司
奥村一二
市崎英二
櫛木好明
深山浩
加藤啓子
続池美津子
安井敏雄
門謙二郎
早川俊六
森原隆繁
片岡寛子
片岡友子
長谷登
前田純一
冨田恭弘
村井幸雄
伊藤顕
乾賢次
井狩彌介
井狩啓子
原田隆宏
村上小夜子
東里香
増見達生
関英夫
曽我見郁夫
筑瀬重喜
苧阪満里子
笠松規子
近藤康博
阪本延夫
松江忠二
増田明子
宇民正
高松孝之
後藤喬雄
今西三郎
今西道子
島村須美子
青山由子
那須一子
文野彰蔵
富田昭子
土橋康男
土橋瑞枝
福谷巌
富田茂利
森崎嘉之
笠松義男
米坂享
太田真知子
富田久枝
和田みつ子
匿名　3名

会　　費・個人会員につきましては年会費1口2万円です。　・法人会員につきましては年会費1口10万円です。
会員の特典・年間6回の自主公演にご招待致します。（1口に付き個人各1枚、法人各5枚）
・ご同伴者は10%割引となります。
・関連演奏会のご案内またはご優待を致します。
・定期演奏会プログラムにご芳名を記載させていただきます。
・会報「ディヴェルティメント」をお送り致します。